僕と君にたりないもの

唐笠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と君にたりないもの

【Ｎコード】
Ｎ７６３８Ｕ

【作者名】
唐笠

【あらすじ】
瑞希とテスト勉強をすることになった明久は・・・？

（前書き）

前回とは違い、今回はシリアス気味？
例にもれず少し前話とつながっていますので、お時間がありましたらそちらもどうぞ

明久ＳＩＤＥ

「♪♪♪」

「そんなに上機嫌で、どうしたのですか明くん？」

カバンに今日の支度を詰めていると姉さんがやってきた。

「べっ、別に上機嫌なんかじゃないよ！？」

「ではなぜ、勉強道具をカバンに詰めているのに、そんなに顔が晴れ晴れしているのですか？」

「僕が楽しそうに勉強道具を詰めていたらおかしいの！？」

「はい。それはもう、雄二君がオープンになるのと同じなくらいに」

うん。確かにそれはありえない。あの雄二が「翔子、大好きだ。結婚してくれ」なんて言うとは思えない。

しかし、なぜ姉さんは僕の友人関係まで知ってるんだ……

「で、明くん。本当はどこに行くのですか？」

「どこって、カバンに勉強道具を詰めていたら学校に行くに決まってるじゃないか」

「では、明くんは本当に補習を受けにいくのですね？」

「だから、ずっとそうだって言ってるじゃないか……」

ようやく理解がいった姉さんに胸を撫で下ろす。

「という建前のもと、瑞希さんに勉強を教えてもらうのですね」

「そうそう」

……しまった……

「明くん、そこに正座しなさい」

「はいっ！」

きたるべき拷問に備え、正座をしながら体を丸める。

しかし、恐れていた痛みはいまだにやってこない。

「姉さん？」

恐る恐る顔を上げると、そこには思案顔でなにかを悩んでいる姉さんがいた。

「どうしたの姉さん？」

「明くんは姉さんのことが好きですか？」

今の姉さんはいつものふざけた調子ではなく、本当に大切なことを話すときの口調だ。

「まぁ、姉弟間的な意味では嫌いじゃないけど？」

「なら雄二くんは？」

「友達としては好きだよ」

一部であいつとできているなんて噂があるけどまっぴらごめんだ。

「では、美波さんや翔子さんは？」

「二人とも女の子としても友達としてもいい人だと思うよ」

もしかしたら今の発言で新たな罰が加えられるかもしれないが、ここで逃げるのは姉さんを裏切るような感じがして正直に答える。

「では、瑞希さんは？」

「えっと…姫路さんはその……」

姉さんに姫路さんのことをなんて言えばいいか分からない。

僕のクラスメイト？

僕の幼馴染み？

それとも、僕の好きな人？

どれも正解のようであって、それでいてどれも違うように思えた。

でも一つだけ言えることそれは———

「わからないよ……」

そう、わからないんだ。姫路さんのことは好きだ。だけど、その好きは他の人に対する好きとなにが違うのかが分からない。それは僕がバカだからなのか、真剣に考えたことがないからなのかは分からない。本当になにも分からないんだ。僕自身のことも、姫路さんのことも……

「明くん」

「はいっ！」

僕の答えが納得いかなかったのか、姉さんは難しい顔をしていた。

「いってらっしゃい」

「すいません、重々承知してい――――――えっ……？」

姉さんは今、「いってらっしゃい」と言わなかっただろうか？それはすなわち……

「どうしたのですか明くん？早く行かないと瑞希さんを待たせてしまいますよ」

「行っても…いいの？」

恐る恐る尋ねる僕に姉さんは笑顔で返してきた。

「明くんが瑞希さんに変なことさえしなければいいですよ」

姉さんがなにを考えてこんなことを言っているのかわからない。だけど、姉さんの言う通り、これ以上時間をかければ姫路さんを待たせてしまうだろう。

「じゃあ、行ってくるね」

「はい、いってらっしゃい」

姉さんの見送りを受け、僕は家を飛び出していく。

「明くんの本気、たしかに確かめさせてもらいましたよ」

家に戻っていく姉さんがなにかを言った気がするが、今は時間がない。

「あっ、姫路さーん！」

学校に行く道中で姫路さんを見つけて、後ろから声をかける。

「明久君、おはようございます♪」

「うん、おはよう姫路さん」

学校に行くとだけあって僕も姫路さんもいつもの制服だ。

「今日は時間使わせちゃってごめんね」

「いえ、私だってあれから何度も付き合わせてしまいましたからお互い様ですよ」

付き合わせてしまったのは、恐らくショッピングのことだろう。最初は髪飾りのお詫びをと、取って付けたような理由で姫路さんと出掛けたショッピングだが、中々欲しいものが決まらず、また今度、その次も見つからずまた今度と幾度となく出掛けているのだ。
いや、僕自身が見つからないようにしているのかもしれない。何度でもいつでも、そしてずっと一緒にいたいから……

「どうしたんですか、明久君？」

「なんでもないよ。早く学校に行こう？」

僕が悩んでいる時、目ざとく見つけてくる姫路さんはずるいと思う。
まるで僕の少しの変化にも気付けるほど、気にかけていてくれるみたいで。
まるで僕のことが好きかのように……
だけど、それはありえない。

だって、君の好きな人は他にいるのだから……

そうあの時、肝試しの日、姫路さんの初恋が続いていることを知った。
あの日、僕の初恋が終わりを告げたことも知った。
だけれども、結局は諦めきれずに今にいたっているわけで……

いっそのこと既成事実をつくってしまおうと思ったこともあった。

もう区切りをつけて諦めようとしたこともあった。
理由をつけて君との時間をつくろうとすることを止めようと思ったこともあった。
だけれども、それすらできなかった。
かと言って前に踏み出すほどの勇気もない。
踏み出してしまえば、まるで氷を踏むかのように儚く消えてしまう気がして……
僕の前から消えてしまう気がして……
結局、なに一つとして変わっていないんだ。
「ん？吉井に姫路、休日になんの用だ」
考えにふけっていた僕の耳に太く低い声が聞こえてきた。顔を上げれば、そこにはお馴染みの鉄人が校門にたたずんでいた。
「あっ、鉄村先生おはようございます」
「西村先生おはようございます」
「吉井、今からみっちりしごいてやろうか？」
なぜだか鉄人は僕を見る度にご立腹だ。そんなに僕のことが嫌いなんだろうか？

「冗談言わないでくださいよ。僕は今から姫路さんとテスト勉強するんですから、暑苦しい西人先生となんかやりたくないですよ」

「次言ったら本当に補習を行うぞ。まぁ、自ら自主勉とは偉いものだ。入っていいぞ」

「じゃあ入らせてもらいますね、２８号」

姫路さんの手を引き、そそくさと校舎へ向かう。

「まったくあいつは反省という言葉を知らんのか……
いや、あいつが勉強をする気になっただけでも進歩か……」

「Ｆクラスでいいですか？」

「そうだね」

テスト勉強といっても僕たちが勝手に行うものだから、部屋などは割り当てられていない。
なら、僕か姫路さんの家でやればいいのだが、僕の家には姉さんがいるし、姫路さんの家で彼氏でもない僕が二人っきりというわけにはいかないのだ。それに姫路さんの好意で僕に勉強を教えてくれるのにお邪魔するわけにはいかない。

「じゃあ、まずは明久君の得意な歴史から始めましょうか」

そう言いながら、姫路さんがカバンから歴史の参考書を取り出す。
その様子は勉強を教える側だというのに楽しそうだった。

「じゃあ、教科書の２８ページを開いてください」

「うん」

僕も自分のカバンから教科書を出すと、指定されたページを開く。

「冠位十二階はですね———」

「へぇ、そうなんだ…」

前の勉強会にも感じたことだが、姫路さんの教え方は本当に分かりやすい。
それは僕と違って頭がいいということなんだろうけど、姫路さんの場合はそれ以上に努力をしている。僕がどんなに頑張っても追い付くことすらできないほどに……
それが解っているのに悪あがきをする。少しでも姫路さんに近づくために……
来年はAクラスにいってしまうであろう姫路さんに近づくために……
届かないと解っていても求め続けているんだ。

僕はバカだから

そう自分に言い訳をして無駄な悪あがきを続けている。いつもいつも、姫路さんといるときは悪あがきで精一杯なんだ。
僕のもっていないものをすべてもっている姫路さんは僕にとっては近くて遠く、儚い存在なんだ……

瑞希ＳＩＤＥ

「姫路さん、そろそろお昼にしようか？」

そう言いながら、明久君がカバンからお弁当を二つ出してきました。

「はい、こっちが姫路さんの分ね」

「ありがとうございますね。いただきます」

明久君から受け取った弁当箱を開けると、中は彩り鮮やかでした。

「姫路さんの口にあうといいんだけど……」

そんな明久君の心配を他所にお弁当を一口食べます。

「とってもおいしいですよ」

「よかったぁ……」

ほっとしたように言う明久君はとても嬉しそうでした。でも、こういう時の明久君はずるいです。

その笑顔はまるで好きな人に誉めてもらえたように嬉しそうで、私が勘違いしてしまいそうで……

「明久君、本当においしいですよ」

「そんなに何度も言われると恥ずかしいよ」

いえ、本当においしんですよ。明久君のつくってくれる料理はとっても……

私なんかじゃ、とても追い付かないほどに……

他にも明久君には私なんかでは、とても追いつかないほどにいいところがたくさんあります。

私よりも優しくて

私よりもまっすぐで

私よりも誰かのために一生懸命で

私よりも、私なんかじゃ比較にならないほどいい人なんです……

だから、明久君に少しでも近づきたくて、明久君のことが大好きですから一緒いたくて色々な理由をつくっているんですよ。私のもっていないものを、すべてもっている明久君のことが大好きなんです。今日のテスト勉強だって、来年明久君と同じクラスになりたいから教えてるんですよ。

明久君は無償の優しさをくれているのに、私はこんなにも……

だから、明久君に足りないものをほんの少しでも私が埋められたのなら、私はそれだけで幸せです。

NOSIDE

「じゃあ、今日の勉強はここまでですね」

「ありがとね姫路さん」

「そのぅ……明久君さえよければ来週もまたやりますか？」

「えっ、いいの？」

「明久君さえよろしければ」

「じゃあ、おねがいするよ」

「はいっ！」

夕陽に照らされ、立ち上がる二つの影。
端から見たらとても近い二人は、お互いのいいところを知っていた。
それでいて自分のいいところを見ようとはせず、ただひたすらにお互いを見ていた。
それゆえに距離を感じてしまう二人はなんて不器用なのだろうか。
補えあえる二人の共通点は以外なほど多くて、それでいて互いにないものを埋めあおうとする。
この同じ想いに気づき、笑いあえるのはいつになるのか。それは誰にもわからず、それでいて容易に答えがみいだせてしまう。
どちらかが踏み出せば、でてしまう答え。それを二人は恐れている。
現実とは真逆の未来を恐れて。

君(あなた)の足りないものは僕（私）が補おう。だから———

もう少しだけそばにいて

（後書き）

休日になると、どうも短編が作りたくなるんです。
しかも明瑞に限定で・・・

話は変わりますが、バカテス２期はじまりましたね。
１話目から姫路さんが黒化してしまい残念です・・・
姫路さんは口でのお説教が似合うと思うんですよ。
原作でも脱黒化してるので、あんまりアニメで引っ張らないでほしいものです・・・
それともう一つ小話を。Ｃｈｏｓはやらないんですけど、友人と行った店に置いてあった明久と姫路さんのカードに一目惚れして買ってきました。二人のツーショットのキラカードは癒されます……

では、今回も作者にお付き合いいただきありがとうございました。
よろしかったら、感想・評価のほどよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7638u/

僕と君にたりないもの

2011年9月10日18時59分発行